

## 学会誌の編集に携わって

野田 松太郎

数式処理学会副会長 (会誌編集委員長)、愛媛大学工学部情報工学科

数式処理学会誌「数式処理」の編集責任者を努めさせていただいて、4年になります。この間、可能な限りに会誌の定期的刊行に努めてきましたが、今年度に入って、かなりのスピードダウンになり御迷惑をおかけしています。学会が学術団体としての認可を受けたことにより、会誌の重要性は今まで以上のものとなることだけは事実です。会誌充実に関する色々の考え方も提唱されていますが、編集を担当して最大の問題は、投稿論文数にあります。査読にとっても長日数(年数というべきか?)がかかり、著者にお叱りを受けている論文が現在でも1件あります。それ以外は査読を御依頼した方々から、早期のお返事を受けていますので、比較的順調に進展しています。査読のレベルはかなり高く、私が他の大きな国内学会で担当する論文査読より確実に上という感じです。この調子で進みますと、投稿論文数さえ増えれば、質の高い論文を多く掲載した学術誌としての位置付けが出来るのではなかろうかと期待しています。

数式処理という研究分野は、必ずしも純粋数学から誕生したものではなく、歴史をたどれば明らかのように、天文学や高エネルギー物理学といった膨大な式の計算(特に代数計算)を要する分野からの応用目的と、人工知能研究の初期のターゲットが中心でした。数式処理システムの多くも物理学者が開発の中心を担ってきたように、いかに厳密計算あるいは代数計算を役立てるかという視点が中心だったと思います。しかし、最近ではこの分野で代表的な論文誌のJCMや国際会議であるISSACが非常に数学的になっていること等から、応用志向は数式処理研究の中心から欠落しつつあるように思えます。このように数学的志向を強めますと、大きな問題が生じることは明白です。後継者養成です。日本の大学に例を取りますと、純粋数学を希望する学生数は必ずしも多くありません。しかも彼らの何分の一が数式処理に関心を持つでしょう。おそらく、このような動向は国際的にもそう変わらないと思うのです。私自信が工学部に所属するから言うのではないのですが、日本の数式処理研究も、より応用面や新しい概念の導入・確立をはかるために努力し、そのような芽を学会誌を通じて広く国内外にアピールしていく必要があるのだらうと思います。このような面で、本学会の学会誌「数式処理」がますます充実していくことを望んでいます。

最後になりましたが、編集に御協力いただいている編集委員の方々、困難な査読をお引き受けいただいているの方々等に感謝します。